

通し番号	5220
------	------

分類番号	R06-24-12-02
------	--------------

紙ポットを使った育苗でイチゴ‘かなこまち’の収穫始期が早まり、早期収穫量が増加します

[要約] ‘かなこまち’の育苗に紙ポットを使用すると、黒ポリポットより育苗期間中（9月上旬の晴天日）の培地温度が最大12℃程度低くなり、花芽分化が促進され頂果房の開花が4日、収穫始期が11日早まる。また、2月末までの早期収量が約15%多くなる。

神奈川県農業技術センター・生産技術部

連絡先 0463-58-0333

#### [背景・ねらい]

神奈川県農業技術センターが育成したイチゴ新品種‘かなこまち’（令和6年11月8日品種登録）は、平年の収穫始期が12月下旬、夏期が猛暑の年には1月になることもあり、市場出荷している生産者から早出し技術の開発が求められている。そこで、脱プラ資材でもあるパルプ mould ポット（紙ポット）を使用し、ポット面から蒸発する際の気化熱による培地温度の低下が収穫始期および収量に及ぼす影響を明らかにする。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 紙ポット区の培地温度は、黒ポリポット区より低く推移し、9月上旬の晴天日で最大12℃低くなる（図1）。
- 2 紙ポット区の葉柄長、小葉長、小葉幅は、黒ポリポット区より長く、クラウン径は同程度である（データ省略、図2）。
- 3 紙ポット区の花芽分化は、黒ポリポット区に比べて12日早く、頂果房の開花始期は4日、収穫始期は11日それぞれ早くなる。なお、紙ポット区の収穫始期は、黒ポリポット区の‘紅ほっぺ’と同日になる（表1）。
- 4 紙ポット区の12月から2月までの早期収量は、黒ポリポット区より約15%多いが、12月から5月までの可販果収量は両区とも5.3t/10aである（図3）。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 紙ポットは「花菜ポット20」（大石産業製、幅9.2cm、高さ7.0cm、奥行き9.0cm、容量約350mℓ）、黒ポリポットは丸型（径9cm、容量約360mℓ）を使用し、紙ポットはポットごと定植した。
- 2 イチゴ育苗専用培土（富士見工業）を使用し、8月2日以降、0.5g程度のIB化成S1号（硝酸態窒素成分は約50mg/粒）を紙ポット区に約10日おきに計4回（窒素成分量200mg）、黒ポリポット区に約14日おきに計3回（窒素成分量150mg）追肥した。
- 3 紙ポットは黒ポリポットに比べ培地が乾燥しやすいため、灌水や追肥量を適宜調整する。また、紙ポットは劣化し破れやすくなるため、作業時はポットの扱いに注意する。
- 4 令和5年10月3日に株間25cm、畝間130cm（2条）で定植し、土耕栽培した。基肥は成分量でN:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=15:22:15kg/10a、追肥は液肥で窒素成分0.5kg/10aを11月下旬から1月下旬にかけて計4回施用した。

[具体的データ]

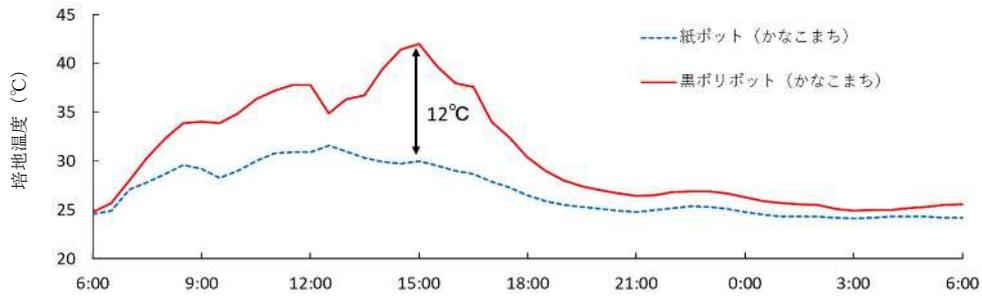


図1 培地温度の推移（測定：令和5年9月5日～6日、晴天、ポット中央付近（クラウン脇）深さ2cm部分を測定）



図2 黒ポリポットと紙ポット（令和5年9月22日撮影）

表1 花芽分化期、開花始期および収穫始期

試験区		頂果房		
品種	ポット	花芽分化 <sup>z</sup>	開花始期 <sup>y</sup>	収穫始期 <sup>y</sup>
かなこまち	紙ポット	9月20日	11月27日	1月5日
	黒ポリポット	10月2日	12月1日	1月16日
(参考)紅ほっぺ	黒ポリポット	10月2日	11月29日	1月5日

z：5株中5株で花芽分化が観察された日

y：調査株の過半数で開花（収穫）が始まった日

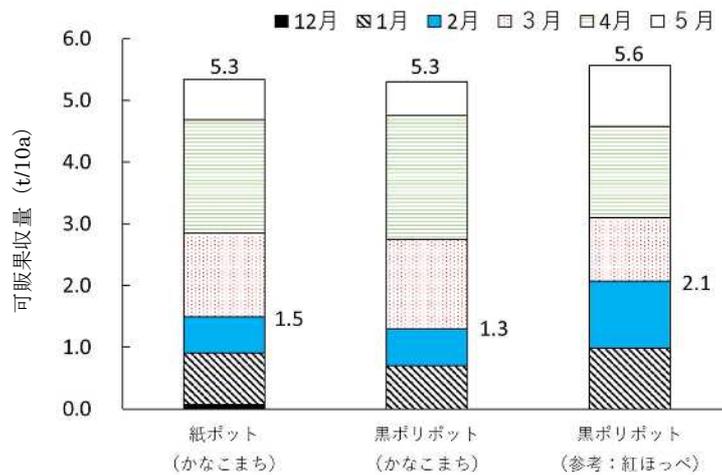


図3 月別可販果収量

[資料名] 令和5年度試験研究成績書  
 [研究課題名] イチゴの脱炭素・低コスト施設栽培技術の開発と体系化  
 [研究期間] 2023(令和5)年度～2027(令和9)年度  
 [研究者担当名] 下菌 健志  
 [協力・分担関係]